
第3次五個荘地区住民福祉活動計画

【各項目の説明】

1 人財を育もう

①日ごろの声かけ、あいさつ運動をすすめよう

- 日ごろの声かけやあいさつがコミュニケーションのきっかけとなり、様子の変化や困りごとを抱えていることに気づく機会になります。
- 日頃からあいさつをし合うことで「顔見知り」の関係ができるので、緊急時や災害時においても、緊急対応や互いの無事を確認する「互近助^{こきんじよ}」活動にもつながります。(3-④参照)

②みんなが助け、助けられる人になろう

- 他人を「助けよう」と思う人は比較的多いという調査結果があります。一方「助けて」と言えない人が多いといわれています。
- 「助ける」「助けられる」は一方通行の関係ではありません。「助ける」ばかりの人がいなければ、「助けられる」ばかりの人いません。「助けているつもりが助けられていた」という経験は、立場の交換の連続で暮らしていることを表します。
- 他人を「助ける」ことのできる時は助け、困りごとがあつて「助けてほしい」ときは助けてもらう、「お互い様」でいこうというものです。

③多様性を認め合う学びをすすめよう

- 地域には、年齢、病気や障がい、ジェンダー、職業、国籍など多様な人々が共に暮らしています。
- 今後も、ますます多様化がすすむなか、「思いやりの心」が最も大切になります。
- 地域の子どもから大人まですべての人が、一人ひとりの多様性を認め合う学びを共にすすめていこうとするものです。

④「ちょっとお手伝い」の「輪」を広げよう

- 地域のために「ちょっとだけ」お手伝いをしたい、或いは「ちょっとだけ」ならできるといふ想いを持っている人は、五個荘にはたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。
- こうした想いをもちた人たちが、地区や自治会などの活動や行事に「ちょっとだけ」お手伝いしていただき、緩くつながることで、地域に人の「輪」が広が

っていきます。

○この「ちょっとお手伝い」の機運を高めていこうとするものです。

⑤六心の訓^{おしえ}の普及・啓発をすすめよう

○旧五個荘町時代に提唱された「六心の訓^{おしえ}」（「はい」（素直な心）「すみません（反省の心）」「ありがとう（感謝の心）」「私が出ます（奉仕の心）」「どうぞ（互譲の心）」「おかげさまで（謙虚な心）」を家庭生活、日常生活における人を育む基本の訓^{おしえ}として普及・啓発をすすめようとするものです。

2 場を創ろう

①気軽に集える居場所づくりをすすめよう

○自治会でのサロンや敬老会、カフェ等の「集い」の場がコロナ禍で中断されました。

○だからこそ、改めて、気軽に集える居場所づくりが大切であると考えます。

○そのため、自治会館や社会福祉施設でのサロン、お寺や神社など、地域のなかで「気軽に」集える居場所づくりをすすめていこうとするものです。

②情報交換・共有の場づくりをすすめよう

○コロナ禍で、自治会やグループが一同に会して情報交換することが難しい状況が続いています。

○活動の情報交換は、成果や課題を共有したり、気づきがあったりする大切な機会です。

○そのため、自治会のエリアごとの情報交換や、子育て支援活動や障がい児者支援などのテーマ別の活動の情報交換の場を設けて、ゆるやかなつながりを創っていかうとうものです。

③赤ちゃんからお年寄りまで交流できる場づくりをすすめよう

○例えば、「コミュニティ食堂てんびんの里みなみ」では、就学前の子どもや小学生と地域の民生委員・児童委員、自治会関係者をはじめ主任児童委員や地区社協、市社協、養護老人ホームきぬがさ、六心会のスタッフなど多様な年齢層や所属の人たちが川並町の結神社で共にひと時を過ごしていて、異年齢、異世代交流の場ともなっています。

○「赤ちゃんからお年寄りまで」多様な世代が交流して、世代間がつながることができる場づくりを進めようというものです。

④子どもや若い世代が地域で活動できる場づくりをすすめよう

- 五個荘の小学生や中学生の地域活動の参加率は全国でもトップクラスといわれています。この五個荘の児童・生徒たちが、成長のステージに応じて地域で体験し、学び、活躍する場づくりをすすめようというものです。
- 例えば、五個荘の様々な商いや生産、福祉の場の体験や学習を通して、地域で一緒になって活動できる場づくりをすすめようというものです。
- さらに、若い世代が個人やグループで取り組んでいる音楽やスポーツ、文化・芸術活動などの様々な活動を支援し、その成果を披露する場（フェスタ）を五個荘の中に創っていくことで、若者の地域に対する愛着、帰属意識（居場所感）を高めていくことになるのではないかと考えます。

⑤誰もが参加できる場づくりをすすめよう

- 昔から五個荘で暮らしている人もいれば、五個荘という地域を選んで暮らし始めた人、機会やご縁があって短期滞在する人などが共に暮らしています。
- また、障がいのある人や外国籍の人、年齢も個性も多様な人が五個荘で共に暮らしています。
- このように、五個荘という地域で繋がり、共に暮らしている人の「誰も」が参加できる場づくりをすすめていこうというものです。

3 しくみを創ろう

①得意なことを地域に活かせるしくみを創ろう

- 地域には他人のことを気にかけて、手助けしている（したい）人がいれば、様々な「得意」なことを持っている方もいます。
- しかし、他人の手助けをしたいという想い、自分の持っている「得意」なことを地域のために活かしていくための仕組みが十分に整っていないのが現状です。
- そこで、そのような人たちが登録して、五個荘というステージで活躍できる場をコーディネートできるような仕組みを創ろうというものです。

②住民同士の助け合いのしくみを充実させよう

- 第1次計画、第2次計画が展開されるなか、市社協がすすめる生活支援サポーターのグループとして「暮らしのお手伝い ほっとハート五個荘」が結成され、活動しています。
- この「助け合い」の仕組みと活動が充実するよう応援するとともに、自治会や五個荘地区での「助け合い」の仕組みを重層的に創っていこうというものです。

③自治会福祉委員会の活動を推進しよう

- 自治会福祉（推進）委員会では、自治会単位での見守り活動やサロン（集いの

場)などの活動が展開されるようになりました。しかし、コロナ禍で活動が中止された自治会もあります。

- サロン(集いの場)が中止されて身近に人と出会える場が少なくなり、孤独感をもつ人がいることが指摘されています。
- また、外出や交流の機会が減ることでフレイル(加齢により心身が老い衰えた状態)が進行し、要支援や要介護の状態になる危険性があることが指摘されています。
- そこで、改めて自治会福祉委員会の活動の“意味”と”価値”を確認し、の活動を推進(支援)しようというものです。

④「互^ご近^{きん}助^{じょ}」※で災害時に助け合うしくみづくりをすすめよう

- 令和3年8月13日からの大雨によって、五個荘地区にも「警戒レベル4」の避難指示が発出され、五個荘コミュニティセンターで避難所が開設されました。
- 幸い、死傷者は出なかったものの、「避難指示」という局面を実際に迎え、改めて災害時の対策について考えた人は少なくなかったのではないのでしょうか。
- 「助ける」というのは実際に手を伸ばして人命を救うことだけではありません。安否確認をしたり、避難をするときに声をかけたりすることも「互近助」です。
- また、平時から隣近所でお互いを助け合うことが、防災・減災につながることから、自治会の実情に応じて災害時に助け合える仕組みづくりをすすめようというものです。

※災害などの「いざ」という時、頼りになるのは遠くの親戚より近くの隣人です。普段から近くに身体の不自由な人や高齢者、病気の人がいれば、さりげなく見守り、声をかける。そしていざというに隣近所でお互いを助け合う「互近助」の力が、防災・減災につながります。

⑤「いのちのバトン」で緊急時への備えをしよう

- 「いのちのバトン」は緊急時の医療情報を速やかに確認し、命を守っていこうという仕組みとして推進されています。
- 「いのちのバトン」の医療情報をご近所で声をかけあって毎年見直すことで、平時のつながりづくりを進めるとともに、災害時に避難する際に「いのちのバトン」を持ち出して、医療情報を伝えることができることから、より一層推進しようというものです。